



ひまわり通信

No.00713. 2025.4.17(木)

健康寿命から貢献寿命へ

もと 「血液健康法」～病気の因を断つ～（第2弾）

●薬づけ医療は、患者の責任！？

もっとも、こうした薬づけ医療は患者の責任がないわけではない。日本人は世界一薬好きの国民で、薬をたくさんくれる医者や「いい先生」とありがたがる傾向がある。病気は薬が治してくれるのだという、他力本願的な国民性からでているらしい。

しかも、病気はもともと薬などなくても自然に治るものなのである。

極端な例かもしれないが、野生、つまり自然そのものの生活をしている動物は、どんなケガや病気になっても、薬なしで治ってしまう。食べるものもなしに物影に身をかくし、傷口をなめているだけで治ってしまう。飼犬などもご飯や肉を食べすぎると、庭にはえている草を食べ、口から緑色のヨダレをたらしていることがある。

生体は自然良能も自動薬理作用を生まれながらに持っている。

犬やマントヒヒの例外的な草食や肉食は、その自動薬理作用を活発にし、健康を保たせる効果を果たしているのである。大自然の摂理にもとずき、健康に最適なように「食」をコントロールしているのではあるまいか。

人間もまた大自然の摂理によって生まれたものであり、人体も、その体内に生まれながら無限の自動薬理作用を持っている。一般に、自然治癒力とよばれるものである。

この自然良能の自動薬理作用を活発にすることによって、ほとんどの病気、ことに成人病とよばれる慢性疾患は、副作用なしにメキメキと快方に向かう。東洋医学は三千年来その治療法を行っている。また、それは同時に私（岡田一好）の治療法でもある。

しかも、その方法はよほど悪化し、明日をも知れなくなってしまったような病人でないかぎり、誰にでもできることである。

まず、薬にばかり頼るような他力本願的な気持ちを捨て、病気は自分で治すのだという自覚を持たなければならない。強引な言い方をするならば、急性の一刻をあらそう病気でないかぎり、世の中には薬などというものはなく、病気を治すのは自分しかないという決心することである。

くれぐれも最初にしたように、薬理学の教科書の第一言、「薬は毒である」という事実を肝に銘じなければならない。ひとつの薬はひとつの主作用と同時に、ひとつの副作用があることを忘れてはならない。やむをえず用いる場合にも、できるだけ少なめ、少なめに、短期間だけ服用するようにしなくてはならない。どっさり薬をもらったら、どっさり副作用のもとをもらったと思い充分注意しなければならない。

昭和53年11月22日 初版発行 著者 聖医 岡田一好

イスラエルの赤い宝石「ドナリエラ」愛の一粒運動実施中！！

(株)日健総本社 兵庫特約店

(有)クロスタニンひまわり

☎ 0120-42-8198